

まで来て病に倒れ、故郷の土を踏むことが出来なかった戦友に対し、心から御冥福をお祈りします。

## 海軍の通信

—予科練習生の教育—

富山県 井 沢 健四郎

私は富山県西砺波郡太美山村七曲という所で、大正九年五月二十日に、兄弟七人の四男として生まれました。軍隊は昭和十五年徴集で、昭和十六年一月十日徴集兵（後に志願兵）として、舞鶴海兵団に入団したのです。入団して海軍四等水兵となり、昭和十六年三月十日、横須賀の通信学校へ入校しました。我々初年兵は入団と同時に学力試験のみ課され、その者の適性、何にどのような科に適しているかを見る。例えば砲術、魚雷とか専門があるが、私は通信に適性ありと判定されたからです。

多くの科の中で、通信は学力と能力がないといけな

いので、舞鶴では約百九十名が通信に選抜されました。その時、兵科の方へは約五千五百名入団したわけですが、その中で機関、主計、医務は全然別個であります。この選抜の者が各海兵団から横須賀へ集まった。そこでまた試験があつて振り落される。百九十名のうち百六十名が残った。三十名は試験の上、舞鶴へ帰されて他の兵科に入れられる。実力本位の大変厳しい選考ですから。

通信学校を昭和十六年十一月に卒業したのですが、その間はほとんど通信専門でした。陸軍でいう射撃その他の戦闘教練はなく、一般教練は多少あるが、一週間に一度ぐらいだった。通信学科は理論・数学・英語（外国語）・海洋・気象学、航海に関するもの、そのうち難しいのは空間に電波を飛ばす、どういうふう電波が飛ぶかなどの知識でした。

私はこういう田舎町から海軍に行った。陸軍のことは、第九師団の演習場が富山の立野原にあった。それは福光町の一角にあるので、子供の時から陸軍の演習を見ていた。匍匐や前進突撃訓練などであるので、陸

軍の一般的知識は持っていません。

私は青年学校に籍を置いていたが、海軍のことは九  
九%ほとんど教育を受けなかった。だから、海軍につ  
いてはまるっきり判らない。海軍用語は独特なので、  
陸軍の用語を使うと上級者から叱られる。

陸軍では「○○殿」、海軍では呼び捨て、陸軍では  
「○○閣下」というが、海軍は「○○艦長」と呼び捨て  
であった。そのようにあらゆるものが、狭い艦内で生  
活するので簡単にしてある。敬礼でも、顔近くに掌を  
着けてやる。陸軍式に肘を張ってすると叱られる。私  
は子供の時から陸軍を見ていたので、中々矯正出来ま  
せんでした。

体罰では、精神注入棒という「バツタ」というので  
叩かれると歩けなくなる。しかし、叩く方が上手に叩  
く。こつがあつて、無茶苦茶に叩くと内出血をおこす。  
ピンタは必ず拳骨、平手でやると鼓膜を破ることがあ  
るから。

しかし、ピンタを徹底的にやられると食事も出来な  
い。海軍は徹底的に鍛える。毎晩のように制裁の時間

帯がある。就寝前約三十分ぐらい、烏の鳴かぬ日は  
あつても制裁をやられない日は無かつた。

学校では、班長が全部仕切つてやってくれるので制  
裁は毎日ではない。学科重点だし、情操教育、服装も  
通信学生としてキチンとさせられていたし、とにかく  
学力を優先していたからであります。

学生は、舞鶴、山形、新潟、京都、富山、福井、石  
川、滋賀などの出身者でした。卒業は全員させる。出  
来るまで叩くので判るようになるから落後者は一人も  
いない、成績の順位はあつても落後者はいないのです。  
但し、中間で病気等で卒業に間に合わなければ、次の  
期に入れられ、終了すれば卒業させられました。

卒業は昭和十六年十一月十一日でした。私はその時、  
戦地勤務を希望したのですが、当時は支那方面しかな  
く、揚子江河口付近の舟山（列島）警備隊付となり、  
中国沿岸の封鎖をしていた。卒業の時、戦地志望をし  
ていたので、艦船勤務をしていれば、大東亜戦争の開  
戦後死んでいたらう。戦友は随分死んでいます。これ  
も運命、陸軍も海軍も皆連隊で、当時、戦地勤務は一

番危険だったのに、結果的には比較的犠牲の少ない支那方面艦隊にいて助かったことになりました。

昭和十八年五月一日、水兵長、同年十二月一日、志願兵籍に編入（戦争が熾烈になり、私の個有番は「志一五七〇」となったのです。その後も引き続き警備隊に勤務していたが、昭和十七年四月一日から中支方面は戦務乙でした。

舟山島警備隊の範囲は揚子江の入り口付近であり、本部は島の定海にあって四派遣隊がある。陸戦隊は千名以上いたでしょう。司令は大佐です。警備隊の中の砲艦には無線装置があるが、大発や内火艇の大きいには無線装置がないので軽無線機を持っていったが、船内が狭いのでアンテナを張る場所がなく苦心しました。

無線機の受信範囲は広いが、発信の出力は機械によって〇・五W、一・五W、三Wとある。だんだんに精巧な機械が出来たが、それを完全にこなすのは学校教育だけでは無理です。初めは機械に使われ、三年以上もすれば機械を使うようになるのです。

兵役の期間は、陸軍は二年満期、海軍は三年で満期だから、三年ではまだ一人前ではない。しかしすべてが判るようにならないければ本当の一人前ではない。先ず善行章四本、一本で三年、だから十二年経たぬと一人前にならない。これで准士官（兵曹長）になる。いわゆる神様になるのです。ですから、善行章一本（三年満期）では無理というわけです。

海軍の階級は右腕についているのが右マーク、右マークは階級、左マークは特技、通信とか砲術とか水雷等。左マークは機関科も同じである。左マークを見ると、その人の科目と技術の程度が判るわけです。

私は、昭和十九年五月、第七三期高等科電信術練習生となったが、戦況が段々と不利になってきたのは判って来た。それに応じ十月に繰上げ卒業となり、直ちに実施部隊にそれぞれ配置されました。

十月卒業後、滋賀海軍航空隊西宮分遣隊付となりましたが、そこは前関西学院の跡でした。予科練の生徒ばかりで、第十三、十四、十五、十六、十七期の練習生を教育したのです。十六、十七、十八歳の者がほと

んどで、志願兵ばかりでした。

教育の状況を申しますと、若い少年兵に通信のことを教えるのだが、今考えると随分無理な教育をしたが、当時の少年は愛国心があつたから良く覚えてくれました。

その少年達は空へ出れば死に行く。そのため精神棒で叩くなどの暴力は振るわなかつたので生徒に非常に親しまれた。しかし、どうしても叱らねばならぬことに對しては、手のつけられぬほど叱つたものです。

生徒は一日でも早く航空兵として立派になろうという気持ちを持った人達で、通信技術だけでなく、精神、一般の海軍軍人の務めや、愛国心を教えました。

飛び立てば、帰って来るかどうかわからない。だから一生懸命にやつた。少年たちは「自分は飛んだら帰って来たい」という精神を持つようになる。「百発一中の弾より、一発必中」そういうことを予科練習生に教えました。通信技術、精神教育、海軍魂、大和魂の教育に明け暮れてした。

予科練の人たちは、今でも戦友会、同期会が熱心に

続けられています。命をかけて教育をうけ、生命を賭けて戦つた仲間ですから、そして多くの戦友が特攻隊として一発必中、飛行機もろとも敵艦に突入したのですから。私たち旧海軍通信校出身者は、海上、艦上で或は陸上で、内外地を問わず青春の生命を賭けたこの大戦に参加し多くの戦友を失いました。さらに自分たちが教育した予科練習生は特攻隊員として自爆しています。

そのため、有志が中心となって、旧海軍通信学校普電信第五七期会とし「五七期会報」というのを編集し、関係者に配布しています。たしか、年二回の発行ですが、発行人となっている前川さんに感謝しております。この会報を読むにつけ、当時の想い出、戦歴が脳裏に甦えってきますし、戦友たちの面影が臉に浮かんできます。

我々の海軍魂は戦後、日本の復興に役立つたと思われ、私自身の再生の根本を作つてくれたと思います。又、この五七期会報が二十巻近く続いて発行され、同期生の心の絆となっているのも、やはり海軍軍人の戦

友愛の現われであると思います。戦没した方々の御冥福を祈る日々であります。

## 海南島掃討戦

—海軍第十五警備隊—

愛知県 小栗浩嗣

私は大正六年八月十八日、現在の岐阜県瑞浪市、旧日吉村字田高所で生れたのですが、小学校六年の時、多治見市に転居。洋服縫製販売の修業をし、二十七歳によりやく独立したのもつかの間、昭和十七年に徴用で三菱電機に入り一か年、その間の昭和十八年六月一日、今度は召集令が来て、約一週間の後、呉海兵団に入団を命ぜられたのです。

応召ということで陸軍かと思っただけですが、その時期には海軍にも補充兵が入るようになったわけです。海兵団入団五日後、我々召集兵は身体検査などであわただしく過ぎ、その間に各方面に配属を命ぜられたの

です。

私は海南島方面と決定し、他の人々はそれぞれ各方面に分かれたのです。海南島は南支那の台湾ぐらいの広さがある島で、昭和十四年陸軍が敵前上陸をして占領した所です。私の勤務地は「呉海兵団、佐世保局気付吉田隊」とのことで、正式には、海軍第十五警備隊・第一進撃隊・第一中隊第二小隊第二分隊でありました。任務は、海南島を占領していた陸軍の後をうけての掃討、治安維持です。

私たちは佐世保海兵団では教育は受けず、待機二日間、特務艦（輸送艦「室戸」）に、佐世保の兵隊と一緒に乗船したが、新兵の私には何人ぐらい乗ったか判らない。推定「四く五百人ぐらい」とかという話もあったが、現地の軍属の兵舎を建てるというので、木材を積載していた。しかし、夏の酷しい暑さを感じたことは記憶にあります。

上陸したのは、島の南端の楡林という街で、その後四日程、新兵としての心構えを教えられた。今度は陸路トラックで輸送され、我々には初めて武器、衣糧、